シリーズ

山口大学所蔵の学術資産

Yamaguchi University

山口大学は、教育・研究に資するため
これまで貴重な学術資料を多数収集してきました。
その内容は、古文書、古典籍、考古、美術、民俗、鉱物など
多岐にわたっています。
それらを教育・研究の場で活用し、未来へ引き継ぐため
学術資産継承事業委員会において保存・継承活動を行っています。
ここではそうした貴重な学術資産をリレー形式でご紹介していきます。

02. 地方豪族の耳かざり

『筈倉古墳出土の耳環』

（山口大学埋蔵文化財資料館所蔵）

今回紹介する資料は、埋蔵文化財資料館に収蔵されている筈倉（はずくら）古墳（山口市秋穂：消滅）から出土した耳環（じかん：耳かざり）です。

古墳の発見は古く、昭和37年(1962)にさかのぼります。同年7月、周防灘の中道湾と尻川湾を隔てる草山（筈蔵山）の北西斜面にて、農業構造改善事業によるミカン園の開墾作業が行われた際に石室の一部が発見され、緊急発掘調査が実施されることになりました。

調査は本学の小野忠凞助教授（当時：現名誉教授）の指導により山口大学生の手によって進められ、石室の上半部がすでに破壊されていること、石室下部には花崗岩の巨大な割石が用いられていること、玄室（げんしつ：遺体を葬る空間）の平面規模は長さ2.4m、幅1.7mの長方形であることなどが確認されました。

玄室内からは須恵器高坏1点と耳環、玉類、鉄製品が、そして玄室内に流れ込んだ土の中からは中世の瓦質土器足鍋（がしつどきあしなべ：煮炊き用の3足鍋）2点が出土したと報告されています。出土遺物の特徴から、筈倉古墳は7世紀代の築造と推定されます。

調査後の経緯は不明ですが、出土品のうち、銅の地金に金板を貼った耳環と銅の地金に銀板を貼った耳環各1点、刀や刀子（とうす：小刀）、鏃（やじり）などの鉄製品、瓦質土器足鍋1点が山口大学に所蔵されることとなったようで、現在埋蔵文化財資料館に保管されています。中でも耳環2点は往時の姿を良くとどめており、優品に数えられます。

【参考文献】
小野忠凞（1967）「山口県吉敷郡筈倉山古墳」、日本考古学協会（編）『日本考古学年報』16号
松田治登（1982）「第1章　秋穂の原始文化」、秋穂町史編纂委員会（編）『秋穂町史』
横山成己（2015）「山口市秋穂筈倉古墳の出土遺物」、山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報ー平成23年度ー』